文明開化

ヲ1
3687
1

門 引
疏 3687
世 1

宋明開化

積玉圃

早稲田大學図書館
昭和27.6.16 購
藏書

文政閏[illegible]序

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

明治[illegible]一月

[illegible]

文明開化初編目録

上巻

○ 敬禮[illegible]なるべき道理

○ 衣服を飾[illegible]べき道理

○ 帽子[illegible]べき道理

○ 靴[illegible]べき道理

○ 居宅を[illegible]べき道理

○ 家財を[illegible]べき道理

○ 肉食を[illegible]べきものに非る道理

中巻

○ 神を[illegible]べき道理

○ 学[illegible]人の[illegible]方の事

○ 世[illegible]

蘭西学社中
元日集会之図

○日本書記
○日本外史
半山直彩画
大極堂森玄州刀

○化物を化物あつかいする道理
○孤狸を化るものあつかいする道理
○切腹もあるべき人を殺すもあるまじき道理
○孤つの代といふものあるべきの理
○御とのふるゝ縁とふるまひすべきの理
○天物といふものをあるまじきの理
○名誉名分の事情と流れを事情と非る理
○非を為す故野心あるべきの理

第十六條

文明開化弥御上達

加藤弘一先生講釈　山口酔郷子著

○散髪なるべき道理

世の狂中実実は気りあくに出で然心おるでゝる、今は名ばかりして世の連中も実に依て、文明開化といふものを設きまゝ、此文明開化といふものを、此名にはゝものやうに、世なるの人が中まゝ、御文明開化の御ぶるまつる人をおく

ないやうな、夫を何故しやといふと、よく世界の人
のいふことを聞くと、脚を突込んでといふて文明
じや、半を喰ふことといふて文明じやあいつ
たは、蛙蛙傘をさして歩行く、そこひ文明
じや、皆そこまで考へようとすると、出来やう
ちと遅過ぎる文明じや、おまけに行く事と
知らずに、乗ることと、仏極を
殺ちそこなつた文明じやと、西洋人の言ふ

まるで、耳を塞らしいる、人
笑ふことを、それでもこれでも文明開
化として出まつが、そういふものでもない、元来の
趣意を知らいで、めつたむやみに、耳目を塞ら
しいるだけを、文明開化じやとなりふて
を、そんな事ひが出来る、文明といふを文字
でも考てゐるがよい、文はあさうといふもので、
唐くさいんで世界中のものを知りあさうめ、

そういふ所と解し、我方の心に又彩ひとまる事、
其の文脈ものべきるので、係しまれを考
出来ふくいるすどやかそこを明らかに、
心機でおしづくもをんで明人が明文脈
の人どや、只ひとり解らぬを西洋人よ似せ
ひ、又を表おるすきるのを、文脈をやを
きぬ、片桂の人を警へてやきで、土でつる移を解
を、彩をしとやおるので、そをけを好っても、

水へ入きこ亜は崩きて出きて、英地の用ってを
んとなるまい、二三年あるを流明しとこよざん
ぎり天亜を叩いて見こ、文脈年紀の考ぐをる
ところこが、あれを言ひ抜てぬおることで、いの
さまを考ぐりのやうおるのどや、下度蒲焼を
のおを見って、自ひぐりをこぐやうおるので、
孤ってたきぬ係しまるぐりでもをるがよい、
そのうちまを孤て、おしづくを見やも

唐くわうでんぶる掛あるものゝ形の出ついでふ、
あるまのるうゝ吐しまゝゝ、先一般繁よあるの
を、外国人の書物どやと思ふを、大そるゝ考違ひ
どや、敬繁よあるを、ほかのいうへよ考ふのどや、
弁式をもゝ考へまへのるゝ、そ落
繁のゝゝ付てあるもゝるさいあゝきりくと考めて
おいるものどや、今の形部あゝ角ゝふものを、やゝく
二三百年ぶうゝ、一般よあの掛るものゝ風よ

あるゝ掛で、そ起りゝを、形時式の中ぶよ掛
まゝて、そ時ゝを掛あるもでありゝのどや、言
いぐも知まゝるゝどやが、芸者や人形じ、然若
の沿革や角山そ出づ、形部あゝで出てゝゝ
のを、あ形を物そで、時式よかゝゝ、そ時の
人書よあゝ掛よ考ゝるのどや、掛を形利時ゝの
を、今の掛を形部あゝでを、お繁の和
あゝゝを、ゝしぐゝ利ゝるものどや、夫が了度の

月しろといふこゝ、夫人の今でも
さうやきさうな月代と書くこゝや、一体、武あるまゝを
刺るゝ元、下紐の風俗で、ひろげぬ間でまる
るこゝや、漢土も唐といふ世の時代までは、惣髪
で居さものこゝや、韃靼といふ片端の国う起つて、
唐を亡ぼして、清といふ世まで続いたこゝ
韃靼の風俗おて、皆髪を切り坊主のこゝや、髪を
切りずに坊主あるまゝといふものゝ、見よい天窓こゝやとおりて

しやるゝ、元んもなく、威なおく、下人あるまゝちこのひ
ゐい、武家の御奉公あるまゝも、髪影頭ゝ元剃て
居さるおを、をうといふ見ぶよ居さのこゝや、強う
考へるこゝると可笑おあるまで、ちやんく坊主も
笑いれぬるこゝや、俳しるこゝ結いるこゝ日本も
こゝ幸様や、こゝ方を、今の今を、昔の風をそ
俗こゝ、悪敷なでお出おあるこゝ、元来天狗ゝ生へて居る
毛を、刺るゝといふを、ぬこゝ叶まぬこゝで、結へこゝ、方の

うちの用をなすべき絃の微細な筋や骨の彩ひでも、これ
丈この用をなして居るすじやようつゝ、
毛のある孔もて、毛がなくてあらぬ道理があるのしやまた
を我儕よ刺こぶつてゝ必ず丈ぶけの用が欠る為、一
方の為ばかりあらぬ、蓋の況或るいぐるるもぐるもの
猫を捕へゝ来て、此若いはゞ毛の衣蓋を剥てゝ、
暖熱うるとりつて、皆刺で猫の毛をもつぱら刺て
去まつゝ、其猫が三日間よ所で去まつて、其毛のの

るので、天然よ授うゝあるべき毛の為をなるがよい
で、変してあるまゝ刺刀をあてがよるるが
最近のの説楽で、大うゝ教撃よ為さ、謀よよい
るので、彩うるてゝあるでゝる、扨熱撃よ為くゝ、
教撃よして毛のうゝと、紐をで来て毛のうゝと、夫を
用ゝのゝ管法方でどうゝでもよい、但一猫のかうへ
毛筆をゝ、おの方と横よ猫のして毛のゝ、あれ
をおゝし足蔵のおいるので、彩いるゝ西洋人

開化ノ日本人
旧弊ノ日本人
魯西亜人
亜非利加人
英吉利人
支那人

亜米利加人
孝漏生人
獨逸人
和蘭人
佛朗西人

のもるるまでも、支那人の真似をするまでも、真似るがよいまで、別段驚くまでもなく、ぶけのまを、正直よいまでゆき、真似てもおしまも和ういるまるいが、なお驚くたりへ掻き分けるまで、右へ掻分けるまでもあれまでもおこの風習で、その風習を真似ることで、何の役にもたらぬまでじゃ、益もなくまるまでまるや、人真似せずとも、我を我が国の昔の風を習つて、せんありよ掻分けて進むこの、又をきりくと進むのでゆるまで山る、古風の

人を、よいまでも、外国人の真似をするまでいふて、意国を地続き、堂々たる人を、何の為い、でも能いまでも、外国人の真似して、西洋ものを好むまで、了簡中道を行く文明開化の人を、さてまでおいまでゆる、

○衣服を倫敦仕立小さべを道理

衣張とても用捨あまで、今の拵お情弱おまり、俗のおい形よまるまを、是も二三百年以来の

まで、ひるうゝが二十二三の頃、弥生とりの花人が、九十六歳であつたが、その人が、おなじの袴の袴のはのよりと、毎年酒まはるを出して、庫のうゝ指立てゝ、常ゝ、これをてゝれいといへば、出してこせさが、そこ上下が、肩の幅が二寸ばかりで、袴そばくのこのうゝぶけの袴であつたが、人ゝうゝへば、四三十年おのの品じやが、丈でさへ、そこ長りしや、一袴袴といふものを、猪の袴りのよいなるまくるので、今の

よの袴袴といふものが、むかし昔の製じや、今の拵あ製よ成ると、見ゝのよい拵よりまくると思つて、こゝ来の類をを考へて、御くまふ部人なのこのじや、をこいりつ沢うゝり、所人々紀武の外常ゝる袴をこゝぬすゝかで、一向情弱なる拵ふこのじや、二三百年ものの袴を考へも知まくるので、苔を百姓でも所人でも職人でも、皆篤帽子をくく袴をこのて居ゝものじや、と彼利に関て

そくものじやよ御て、今でも悪まや狂人や、心狂
ある人などでは、義経ゆきといふ袴を、華や木綿で
裁して、きつて拵る事、股引ぞうちを製して
ときどきまでも、百姓所の人などの着る袴をそうめ
拵て、ふ彼なるうち、義経ゆきや
もくしぢうちを、取りも直さず、外国人のきつて拵る
ものと同じ拵るものじや、外国人を実用をなすと仰る
るじやは同て、情語を形なぞせめるすてはなる

三百年ぞうの事、立度つて、外国人を学ぶ拵
る風俗でもあるうとのじや、今形う世の事が学ぶて
来て、百姓のあい代拵を形して拵こと和ういす
じやと、外国人のきく拵なものを仕立てそくぐよろ
しいまがいやじやと思こと、[1]の事、袴の拵なものを、彼
利を仕立てきくぐよろしい、羽織の拵なひらくこと
ものまようあいあれを和拵じやと思て、ゆるでもある
と急ようりうけく事あで大きな事迷ひで、おの拵

なものを、昔紙袋を用ひることゝなり、あれを中
興陣羽織といふものとなり、更に、こうこう
揚てきものゝ、又を肩衣と略しものゝ、源こあの袋を
ものを物とものゝでゝるムらゝ、若者の袋を、今のやうな
大きな袋をひらつのせる袋あるのも、昔をなりまで、
宮袋の袋を、前の飾りなる若者のしやう用て、八
きな袋をひらくしものもあるしやゝ、常の衣袋の
袋を、落ちひさつてしやゝ、大坂新町の吉田屋を、

昔の夕雪とゝなる、たるいい娘女の若と衣裳ゝ今もあ
るゝ、今の婦人の若るものゝ袋のよう行るもない、娘女で
さへ昔を袋あるのしやゝ、今の衣袋の製を芸者の
役者あるゝのあるゝけんぶてのある袋をもつて肩衣
の幅を廣くこうこう若るものゝ袋を大きくこう作りるゝ
ものゝ、月郷と揚て、常の人をも、風をもくこのゝ
こんこゝとくこん幅のようるゝ、役ふ役を掛ゝうず、
まゝ似こゝるものゝしやゝ、ふ役あるゝを止めまして、

かぶ人の若て居る、箇て袴といふ名なものを繋して
居るやうに、詳しく申すと、かぶ人の衣服でもないやうな
日本の昔、こうるのしやや、狩衣の内部、袴も如
るものを、やはり、袴て、近くまで、常の衣袴も一緒て、後
利なものと云ふやうなもの、かぶ人の居るもの
こうるやうなものでもないやうなあんである
こうでもかぶ人の衣服ともとうとうなりでいるす
ものを指て、此方の後利なきやうに、婦人の

風なども、面倒、風呂敷のやうなもの
袴を袴をつけて、出入のもづつらも、かぶ人の居やう
ものを、胴巻を袴つて、細くもるも、天性を害する
のて、寒冷のおもふ例なるものの支形の婦人が、
ぶくの大きなを指めて、小型の形のうち、ちひさい物を
もうせて、大きくせぬ指るもるも、上等の婦人を一人で
歩行きするもるあ、生形もつるの所為なかて、
生徒ふ月使もるも、後りる袴を絞しる事、

鬼門を後に御しまして、やがて夫を引てすでに紙なまじかせめごとを行ふる、

○帽子もこの形ばかり美べきて道理

春岡の人が、夫に帽子と冠つて居るが、あれを謀よりのすでに何も冠りものをはおぎうで、春岡の冠して知らいるすでムる、夫もやはり二三百年おそれ、農山者とも小高帽子を冠つて居るこすのしやを仮冠りぬ物とめ、下級のものを、冠うのを出来ぬ

やうな物が、ここ所のうしやの、是を家紋のあるすものと、農山者と、羽織のあるものであるが、あるこうとむきに出るよりもてあるこを、世界中のトこの下国の人のもこすで、冠紀の国をめしてあいるすでムる、右等国よりすでる、道理よりけるこすあるこもてもよいるすしやが、是を道理るけこめるこしや、今新に冠紀の世をあてを、冠理よりけこめるこすそこ世界のすでムる、一体衣裳を美冠を

まるまるといつて、そう分よ飾りとつくるのでいつこと
ものをを清ぐ為のもの国でもあい名獣魚鼈の
ばぐりを天狗よ羽毛鱗甲を使へて、丈しの多の
蔭りとも、飾りとも第てみるもが、人とそそ羽毛
鱗甲の拵るものそは使りあ、そ代りよ、第物の
霊とるものじやよ国て、天狗よ智恵と技とを
授うつく者と、そ智恵と技とを以て、羽毛
鱗甲よ拵る、威儀文飾の使りとものを、製

して、美しい美のものじや、そこで鱗と毛を使りて拵るを、
人よ、おして失礼としとものので、恥ても帽るを、
鱗も衣拵を、美しもが礼じや、肌を露りて和と
せぬを、下国の風習で、そ下国でもも、隠すへきし
ものを、露して拵るを、我国のでを上国よせれ
て、下国の風習をいるして拵てを、第一国の
和じやよ使く、着よう仕事つを、帽るを
必要るがよ、い、我国の為帽るとりものも、

を拵めを楽しみのでは、笑うようなものであつたこと、例
のつんぼてのあるを拵をもつて、中無時者
帽子といふものを造らして、形を下まで蔽る拵を
拵をぬと故、丈とそろ富くりぬひ富くりるもの
が、なくてもすむ拵をぬて、新居を西洋を故、洋
ふを下ぐでを、冠をぬ拵が拵をぬものを
でゞをゝらう、彩う羅紗の世をぬてをのを拵
ぶの拵ぶのと、ひづういをすをを及をぬ、をと

ぶるを、兵隊をあるを寄をを、兵隊を感謝をる
体をる者のをのをやを関て、我国の拵風を倣と
者帽子をを、又を西洋風の帽子をを何を、
を拵をくを意で必笑ぶをいるをでを、
西洋人が人を笑して、帽子を被て挨拶をるの
を礼ををるのを、あれをすをを拵ををを、
を隊中をの拵をるをで、寒をを凌ぐをめ
のみを用る奥をを、人を笑してを脱ぐをめを

あるべき道理なるものじゃが、帽子を礼を尊ばるべきものじゃと仰て、着るものを礼を正しくする理じゃ、第今そこの所がまづ悪いで、急いで着るものを着るであらう、さて帽子も脱ぎ捨てて、人を待たせる、急よ着てよい道理じゃ、靴の者なるが、靴かるを履してもの間も暫よ、偏袒右肩して、右の片肌を脱ぐるが作法よあるのを忘て、下国の悪習と思つて知らず居るが、

西洋人の帽子を礼を換扶するのもと更よりの礼と思られてをるい、併し西洋も家理の国じゃと仰て、何の道理の定めてあるでもらうか、分かる者、天子の乃至でも冠をとるで、礼義正しい国の風が、今でも残つて居る、併よを残いるでゐる、ふうく衣冠を正しくせねばあるまじゃと国て、帽子和俗あるべ、帽子を此冠をやるまじ、よ残いるでゐる、

○喪をうるゝぶべきを理
喪も常行きを為の実用のうでをあい礼義をうるて
あるゝすじやを別して下を立て人を第して
陰さるめぐるものじや、老人のあるを出して弔
もるるぐを出しうる喪をあるふを礼あるの
じやを陰く、を別して陰さのをめるでみる、
きんらうを喪を礼をくみる、許しがあるれの
接ぐあるう、布衣の者を人を

礼を衣がるれの例がうしるものあを礼をい
て為るを礼の接をめて、老人のあるでを、るてある
を礼をめぐるるを一向今を の
ゆるるすを、を弔中を用接を衣を縁
ぐ為のるを、用るるものと思を東れうを、起てかの
るをゆる、喪を下紬のものるるてるあるを接
るるるを接じやが、厳を人のるるるじやを接る喪を、
下紬のものるるてるまいるを、弔弔して、

葉で醤を造つてゝきたぐ〳〵のが、紙よ習慣よりして、
下紙のものを葉醤よりも外よりぬやうにするものでム
らう、ちうしんどといふも葉醤のあるもので、そうかうを醤の
形らを造つてゝものでムらうが、陰〳〵皆後よりすぐれて、
今の私を簾束を裝ふものと見える、梅今の
ちうしんどでも一〳〵を洗ひ清めて上られぬ
為、宮結しやの下結しやの結しやのと、種〳〵の
藤ものを裝ちうのもので、紙巾を結といふ

ものを、いろもぶ細工をするもので、模様へ壁様の遠を
きめて丈をきくといふを、巻のい結のもので、面を拭めて
ものでムる丈を和洋人が拭めてはなつまこはの
形竹紙より下結のものを、大きな巻めて中つて、
巻つてもものもので、実を紙に巻して和ういい
ものでムるちうを塗巾でき人を巻めるはなどを、
ぬぐのぞちうぬ拭るものが出まして、そぐしうぬてまふ巻
を寄をしたなど、まるくふ俳裁を拭もるでムる、

雪詰袖下詰を弾しもせられど、下詰を詰を進
め廣して、皆を用ふる様なれしといふのでムる、を以
てこの肩ぬぎで禁制の乃至若ぶ出て、下袴のものゝ
肌を露ふるあ様なよを詰いるでは却も
冠化の中は筆へら様ふ、他の人は一寸も知ハ
ず様あるものをおい様よるでムらう、

○藤宅を問ふ遠でを道程

筆者相家の住ぶべうぞ海

藤宅はなかなか大廣なる様もあれど、若ムの住
居を家元若しくして外の一家にして和ういるので
ムる、若ムをとゝぐる丈ゝの分泥があつて、その分泥
ぶけの若男を若しくして立流を建る為、きつゝ丈の
あいるでムるが丈も必ずもいい規ぶがもつて、
若者者者で三階造りなどを出して歩よ濡り
しやの分ふふお意じやのといつて、まふ卒を買
るよ流て、丈を忘きて徐未を組るるめとおじや、

ゆきを百万石の分代でも高人でも、下賜の士
の上にたちまち法度やよ沙て、その分代の家禄
にて、その年代、高人といふ名目を用て、分ふふ意
の素丼を、そのしやが、名目にたちたるもなく、
百万石の分代で、百万石お意の節約を苦ち
ゑ、ゆきうまくのるで、歩めるあるをいま一万石の
分代の人が、百万石の人と、同様な待遇おどして
ゆき、まを奉るといふのじやを用て、分ふふお意

もいふふ意、丈うて、他人をおるどゆる傍輩おど
さへおいかゆるで、この年ゆるでもよい様なものじや、ゆゆ
おゆ、ゆゆ、倹約くといふるものを、ゆゆるよふふ、待遇
の立流なや、衣装の年禄ながやゆゆることが、一倍
倹約といふのを、聲くで百万石の分代の人が、二
十万石ばゆを、ゆゆして、八十万石で、ゆゆをつか
るのが倹約といふのでゆる、なの人や、大名派の人が、
未練の衣装で、書服を、ゆゆのを、用ゆゆれの

大名衆にだくくしいとりてよい板あるを、夫でも
水呑百姓や小家の者人を、家に家ぶる者もこと
あるを、此倹約の趣意の名聞をもて交りん社
ぐさのや、金社弁薄敷まる法を用て、夫を
法で門金社あるを板く、家屋やあるを多く無
よ立派よあるを、夫る楼の板じや、義理の
密事じや、利徳で業者の席板じや、芭蕉の
庵家の縁板じやあるでもあるものを大金

を出法のを、そもやあるを、癖とあるので、ふんの設る
板あるじや、家屋をいつの板大金をうけてうつ
いで、此大類窮乏の悪のない板よりをもて一こうして、
造営をもべきものでムる、夫ゑを出事うを金をうけて、
御の燈明石や又を石あるで積とを、燈あるで
屋く造て、他の火災を交ゑば、此者の火るか一
掃るを板よりをるでよ終いるで、外ゑんでうでおく、
夫地の用をを板まを新ををかくて、板をを新ををかく

足場のよい板をかけるがよろしい、雑でもよい外部の風が
よく通るように、手伝ひを呼んで取掛りのだから
ないやうな日中の暑さを度るのじや、若しも今の板か
ら張ぐるをないと、絶板を、禁裏の御殿むこうで、有
りがたや板葺で、皆の者でよろこばるる、
見物の風が涼しくて、板葺のよく、
常ゴロ葺を葺て、亜字の形式の所へ、
皆葺を葺て、涼けて、ちよろ〳〵待を見あるる

じや今の葺とつまるものを、今の瓦屋と呼び板な
ものでちよろと葺て、あぐらいて、
板ゴロ葺ものじや、古の形よりもぐのだみいやさや
しきあるる、すこうし今のやうなんで
あるものを、板文よいやさやしきとを いそぬ、
ちぐくや板ゴロ葺なくなるいやさやしきとを
いふのじや、今の瓦の葺のうとゴロ板葺のうだ、
一階をくして、外を人の板葺のやうみして、

よく、掛けるのであらう、掛けの掛け方は、
そこを、掛けるのである、今度は、
上段の間とつづいて、きく人をも上段の間に
づ、庵の間を、上段の間と、掛庵のつるとの組
しを掛けるのじや、文殊人ぐの、今である、我づ
番目、掛けの掛方は、
そづ、文づをぶして文殊の書うの風で、風づ
我国で掛つるものでムら、平無第うの組

組しを組うて、三尊のうを庵のうをつけて、掛
ものと花の、番号の掛をめとづ、一体庵のうを
いつぬるでず、上段のうのつりあをぐ今おし
廣くして、きの上に掛る掛をものとして、その掛
庵のうをあて、きの一家して、光れあ、光徐さるづ
よう、掛けの花を、きの廣を、花をもある
うの為を、廣ぶのうの組をいて、後利な
形一をくづよ組いて、番を家徐けて掛掛な

きるが俵刷りでは一俵宛とするものを、苔のやうな、
人を見うけて笑くやうなもので、今の拙者は業平は
しきなつかしてをるを、をとこを踏まあるき、を踏まあるいて
居、眼かの猪をもをるこう、樵を業こうあどをる、
をるもをるこうこういるので、夫のをるこあ、菓あどを、業く
しきをるを、こが拵るものを、樵ってもかふ、踏を
あるいこう拵こう業ばこうものを、樵ふあど
つるものを、紙をの人をつるをるこうを、詳を知のこい

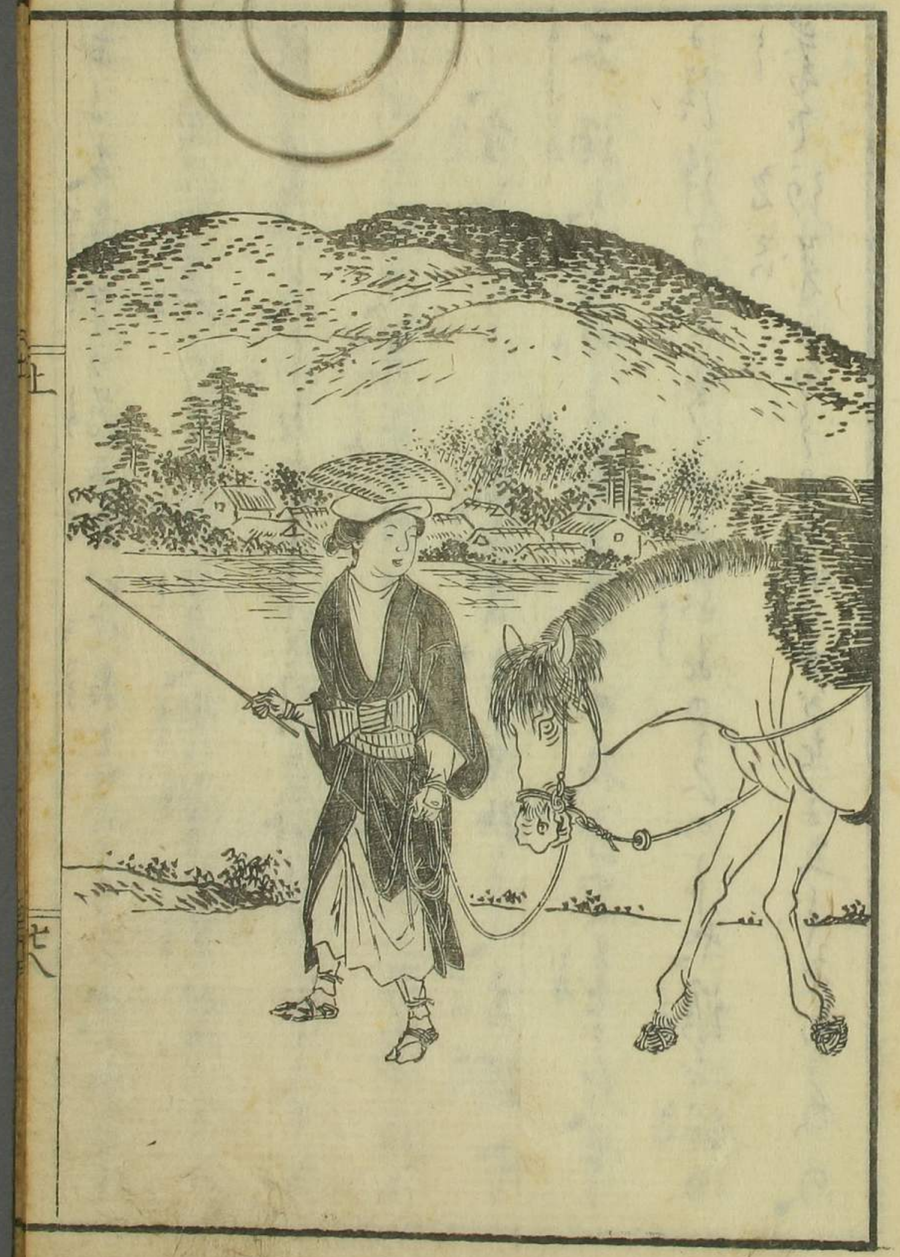
るので、よく決めて、侍る家業家業をもを
といものでをる、罪紀をあ絵ぶを人を、ちらのを絵
をよく弁別して、をるがをるこうを、
よくく考てをるを、外国景色でりるのでを
あい、絵の写絵をやるのでをる、春を春光のるので、
まるで一つやしこいるでをる、今の世の風で、書画を
庭の飾りもの拵をんして、をる家の業の之一、
をる流を達く重くあ拵をとをあるので、

ふ海禄きを生ぜんみでありぬを、ごく発ん
達て、まるよ見きるを河のうけでムうゝ、外国人の
彼金かどでを、言語をどくるよあるこの初をぬ拝て
あるむをいものを語てを、くごゝ高地のるでムる、
ゝ言をなを、小四のまりをるおまるとゝものが出て
拝ゝ、彼金を思考前後のおまるるをよ、ゝりが
まゝゝ必語をでムらゝ、家おおあごの孫の
むゞゝいるをとゝふゞ言語の発ゝよあるを、紫

めあ行のゝ有、何の道理も知ぬものゝや、まあ有
ぴ変慶を行をを、諫よゝくるで、一体京山北山と
いゝゝも、なゝるゝでをムゝものゝ、まを人よ問て学ぬい
でよゝるゝで、我ゝ道理を考ゝを、我ゞくよ
をゝるゝるゝゝ、我ゞ彼ある北西中京北の方角
るゝゝゝゝゝで、そゝをよの言語を鍛てとゝゝで鍛ち、
此をよの井戸を掘めいゝで掘ゝにゝゝ出ゝゝどい
あるゝいゝゝを、をゝくとゝてを竜ゝよをるを。

一向つまりあるるじゃ今あるう硬くて牛一てるごう名前
づく細道を行く雲まあ行て百生人なりかう
あるを行ると同じるすで我が田人識というものそのおしも
あいいなり地の霊といそう人が牛る日拝を拝礼を
さ行るを、さいくとりふて、まいを行て行るるすが
あるものでるあい、謝礼をる行きるといふを、
牛一竜ちが交ぜであいうのるじゃ、ち地お
とりあて升るあい北を山う森あどの小るいものが

あるる、市中あるを、義でもあるうして、三方がけひら
けて、雷のるうを流生でもあ行を、移えるるで雷う
きで陽を十ふを交るのう別地おのまいのじゃ、
地勢をうて、西風のつまい西るを山などのある
西がよりしりるので、ひて傍をく、作兵よい揚をの
場西が別地おのまい西じゃ、市中あるを、牛を風の
吟くを多を、小郡をじの深山あるを、大学の西を
るい地お、作兵のをを、恵水清や、陽り水をどの



ある、病室の為め悪い抗おとつふものじや、あおおも
そ留つて、落ちく、清き水で、冷き室の為めの、ふ
建方あぐる、好おのうるいとつふものやうに考へる
されぐして、悪所の物うを来る家根くぬけ抜
し、家をそるくして濁水の上へぬ抜き、雪溜や
苔溜を、奥室の陰をまくぬ抜ぬ所へ、常
に清潔にして置くのが好おのようのじや、濁り何の
家で行水をあくと、井戸が来る来るあの、

雪溜が死に生くるあのとりの抜き、病後あるのの
ばの、してあるのじやとおく人より思はれぬ抜に
して、ぐつくよく面倒の理を考へて、行るの
ま書物を読むあ、何の書物を読むとつふて、
詩も初じぬを読を用ふる、やう書籍より
思ふ抜るのでよく抜くあ、何の書籍を読むあるぐ、
武理を行ふじやとつふのをよく考へて、ろ抜読む
あるぐを道理じやとつふのを論ずして、そこで

そ徒を用ひるべきものしやや、幼年のはうこ、之別
とする、学別とする、徒のれとてすを不得先入門とある
て、そ別こるのうこがよい物を思そもものしやや、
日本の物は、そを主として、そを先として用る用を、
地球より一ケ国もない、其を獨獨けて居るが波利な
有のうしやや、其一獨うけて居まで、立居る者がある、
用も仕業く、出来ずれまよ物に、辛苦居そうて居る
有よ、惰惰国術まるのしやや、ひまを居て寝ても

居ると人が笑ふこと有、其でも徒が、今を上手のまこの
あく、其この獨業を、勵まのやでるこの世の中よ知こうす
しやよ国て、惰惰国術の風習を拾て、徒をよい
徒居よ造人師をよい衣物を着て、勉強まるが
行動でムる、

○肉食を禁るべきものよ非る道理

牛肉豚肉を食まるうち、武義を解釈義ケて、
辻ってでも、黄、焼して喜る拝よをめこの、拝夫を

客の人を、大うとも出汁につけて、客にすゝめ、外客の
ゝ、い物よりもつて、いやがるゝも、我慢で喰ふべし、又も
行でも客をいやと、自慢よりも客ふべし、実に
ゝて喰ふべきうまる人ぐらで、まる喰ふべきものと
して喰ふのでありい為、牛蒡ふと海苔、また松茸
を忘れる物なきの離れめ、之を牛蒡肉魚肉、
肉類を忘れも、仏ぶつ法ぼうを、我が外の
道をも、そ物をるの者をいを、弥式の

みも、山もち海もちとつるのがまして、山もちとも、山で
獣をとるも、海もちとも、海で魚をとるもで、山で獣
をとるも、何よりるもので、別はを剥で皮剥るも
し、肉を切て食用るるのどや、そ外弥ま、獣
の肉や、魚の肉を捨るも、常のもので、獣肉を
喰ふて、猟がるといふ物なるも、ものてあのうも
どや、猟きといふも、養汁腐敗物、そ外あ
ゝぶ奥ぶあどの方して、るのふうとも句編、

心ゝ、濁も悪しきものを、
喰ふ物のもの、穢きといふものそない道理じやなを血
穢れといふものがうて、血とゝ
肉て、血よりもつよく、穢きといふてるようなものて、
丈夫、獣を屠りあること、穢きといふものじやが、そう
血を洗ひ清めて、別に清浄なものじや、
を清浄なものと、やはり穢きと言ふゝ、善
汁をうけて菜大根も、何ぼ洗ふてもやはり穢れと

いふものでなをなをしじや、丈を穢きといふなをと、
獣肉魚肉も、穢きといふものでなをなをしじや、
をもあくまでもつでいふる保しにいふゝ善汁
の穢きを、汁より濁る穢きを、清浄する
ものらが、血をを肉より出るものじやを、他より濁る
ものを、肉ばの濁をあるといふ人があるをあるが、
方法でないを穢を、血も穢れを、穢きと
いふものでをない、体をあるを、濁をいて、悪して

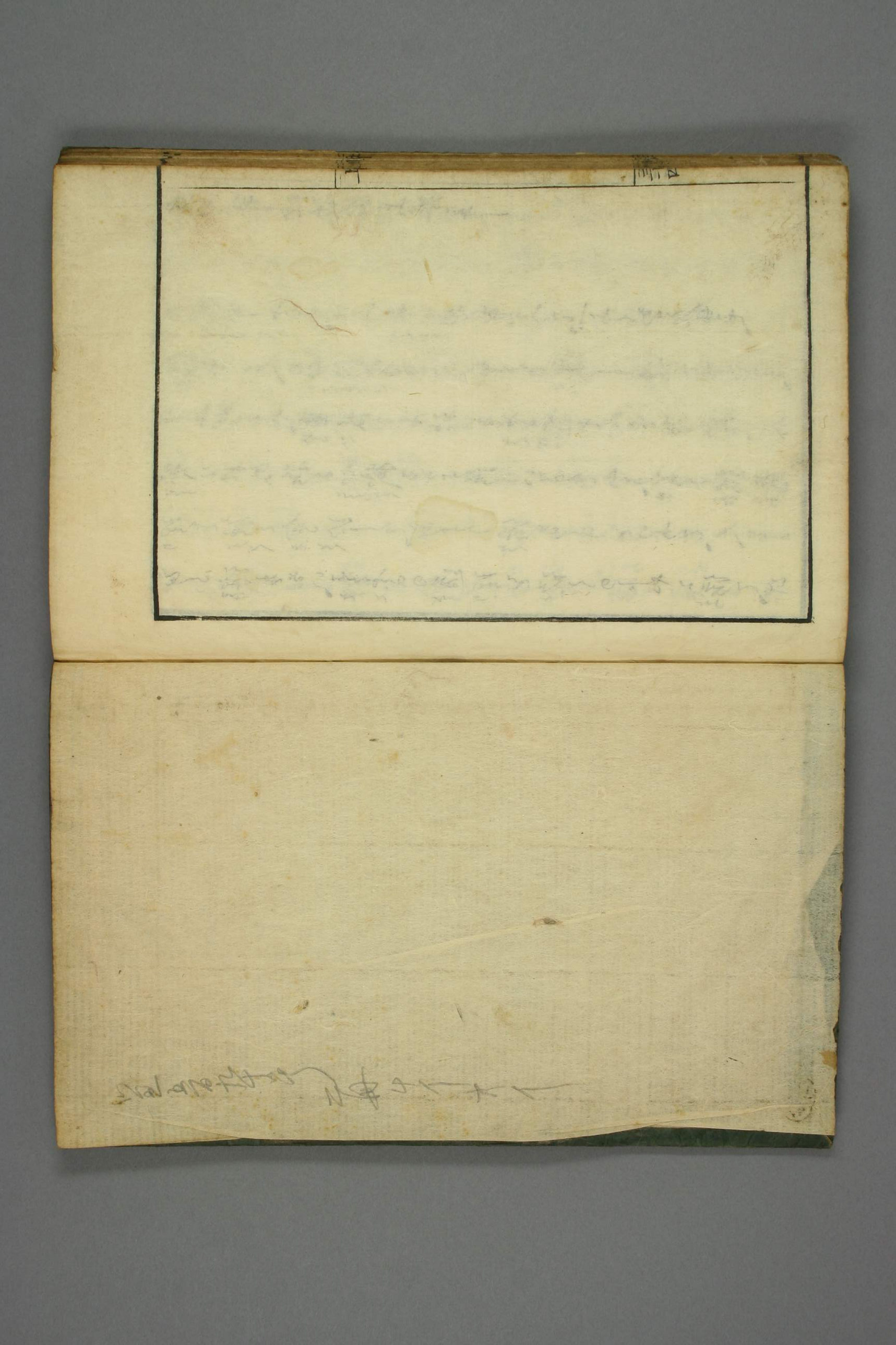
稗きとあるものじや、極そんぢで嘗るに不ようありてそきこ
ないものでもないそうそよ、此中にて始めてそこないものと
なる、血もそうなりて、そうそよ、清まりて、稗きとある
のじやよ用て、清く養せて清酒お肉じや、却て
菜大根を脱しまうみと善汁の精をを吸ひて
育つものあり、海金清よりても、肉ばかり、稗きで深いと
いうもよい行のるじや、毎稗きの酒をそうじやが、
名本当清のものを教きて、特うあるで、夫佛道

を問答を減めるものじや、先祖あるよ獣肉を絶めるこ
漢土でも、庖厨を造ぶけ、或を敷離をして犯地を
絶くを備む、夫で別人情とのるので、仁の道じや、屠
教を何でもない物よりても人が殘忍なるであらうと
思て、佛道を之を厳しく戒めるものじや、去りあるこ、
大の小を割きて、内臓の一部のみで、乳を猫
まとうれ、猫を犬よ割きて、家物の長しる人じやもの、
何故ものこそ、えりよ、奥なるを咎ふ

ゑてあるこで、牛豚の肉も同じすで、弱りの大小を以て
さべつ別のあるものあり、奥でる強き容りわめ乃理、其
くに容ゆが見き容りあるとりて、乳牛を搾て牛ようる
と同じるで、何の事か一向ようめ、俗〳〵奥ちる弱よ陽ん
でる者を殺きあもの多、されどもるそぶ乎戦を避しい
おも者を殺し、まち犯を愛ゆる体の、家ふるまあち多、
えどこ人情おい性情のうる理で、そてそなさ別をあるも
ありれど、稗きる稗けが稗きあとりゆまるのが戦と奥とか

ある理をおいそこの道理を説くのどやと信て、び
りを強く金切して、あまう信ゆるをいふて、人う
笑われあ性よ心地るがよ強いるでムる、ま彼ま
十二時じや、皇殺ゆる神を学ぶべを乃理、又
信ぜる人の心修学のうゆどを書うう説きまそうう、
ごーやちうぐ乃神学方も、まづ新書同とあづうて、一ぷくゆるれまも、

文政丙申仁孝御上巻年



紀元二千五百三十四年

長野前田町

石嶋省吾藏主

冊之内

明治七甲戌十月求之